【書評】

吉見俊哉 著
『「文系学部廃止」の衝撃』
（集英社，2016 年，本体 760 円，新書版，256 頁）

篠原新
岐阜大学 教育推進・学生支援機構
教養教育推進部門

本書は,「文系は役に立たない」という昨今の批判に対するありがちな反論――「文系は役に立たないけれども価値がある」――を大きな誤りである指摘する筆者が「文系は役に立つ」ことを主張したものである。まず，各章ごとの梗概を示したい。

第 1 章では, 2015 年 6 月 8 日に, 文部科学省が各国立大学法人学長に出した通知（「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」）が，メディアによって「文系学部廃止」と報道され，その後，文科省批判へとつながっていく過程が批判的に検証されている。そして，筆者はマスメディアが「文系学部廃止」と安易に報道したことを問題視している。ただし，筆者の力点は，マスメディア批判ではなく，この一連の過程を追う過程で浮かび上がってくる「文系は役に立たない」という文系軽視の風潮にある。だからこそ，マスメディアによる「文系学部廃止」という報道が現実感をもって受け止められたと指摘する筆者は，その後，特に国立大学において，どのように文系が軽視されるようになったのかを概観している。筆者によれば，戦前から持続する文系軽視の流れを決定づけたのは 2004 年の国立大学法人化であり，これ以降，資金獲得力のある理系がますます重視され，資金獲得力のない文系は「役に立たない」とされ，ますます軽視されるようになったという。当然，筆者はこうした流れに批判的であるが，同時にこれまでになされてきた「文系は役に立たないけれども価値がある」という反論ではそもそも「文系は役に立たない」ことを受け入れてしまっていると指摘する。そして，今後は「文系は役に立つ」と主張していかなければならないとして章を結んでいる。

第 2 章では,「文系は役に立つ」と主張する筆者が,「役に立つ」というのはいかなることなのかを検討している。筆者は，たしかに理系は既定の目的を実現するという「目的遂行型の有用性」を持っているが，一方で文系は価値や目的自体を創造する「価値創造型の有用性」をもっていると論じている。そして，文系は理系よりも長く役に立つと主張している。続いて筆者は，文系＝教養という理解が誤っていること，さらにはリベ

ラルアーツ，教養，一般教育のそれぞれの違いを中世からの歴史を振り返る形で説明している。そのうえで，こうした長い歴史の中では重視されている「価値」が幾度も変化してきたが，この「価値」について考察してきたのが文系であり，人文社会科学であると指摘する。それゆえ「価値」について考察してきた文系は長く役に立つと論じている。

第 3 章では，現代日本の大学を取り巻く環境を概観している。そこでは少子高齢化が進むなかでの大学激増や大学院重点化が大学の危機という帰結をもたらしたことが述べられている。そして，こうした大学の危機を打開するためには，大学が今のままの組織ではなく，新しい状況に創造的に対応できる効率性や戦略性を備えた組織に変わっていく必要があると主張している。筆者はそのための方策として，ビジョンの共有とインセンティブ，教授陣と事務組織の適切な均衡を挙げている。そのうえで，今後の大学の在り方として，これまでにように各学部で専門科目と一般教育科目が並列しているのではなく，理系・文系横断型へと変えていく必要があると指摘している。

第 4 章では，人生における大学の位置づけについて検討している。筆者は大学の 4 年間を「入試」と「就活」に挟まれたモラトリアムとして認識することから脱却する必要を強調し，今後は諸外国のようにもっと多様な年齢層の学生が大学に在籍するようにしなければならないと主張する。それは，大学の人生の「モラトリアム」から「転轍機」として位置づけを変えることであり，筆者は人生で三回大学に入学することを提案している。1 回目は高校卒業後，2 回目は 30 代前半という新たな人生のビジョンを考える時期，3 回目は 60 歳前後という定年を迎える時期である。そして，筆者は 2 回目以降の入学で，学ぶ分野として選ばれるのは純粋な理系よりも文系，または文理融合的なものだろうと想像している。それはこれまでの経験を経て長期的な視点で物事を見つめようとなったときに役立つのが文系であり，こうしたときこそ，長期的視野を持つ文系が有用性を持つからである。

終章では，これまでの議論の要約とともに普遍性，有用性，遊戯性について検討されている。筆者はまず，ヨーロッパの大学が，国民国家や資本主義よりも長く続いてきた制度であることを紹介している。つづいて，明治以降の日本の大学の経緯から，大学とは時の政府や国家を超えた普遍的価値に奉仕する存在であると論じている。つづいて，筆者は，ホイジンガの例を引きつつ，文系が役に立つという価値創造的な「有用性」の基底には「遊戯性」があると指摘する。そしてこうした文系こそ，伝統を大切にすればよいという考え方を変える必要があると論じている。

以上，本書の梗概を示してきたが，本書の文章はわかりやすく，論旨も明確である。とりわけ，第 1 章で文科省の通知について，その文脈を理解しようともせずにいい加減な報道を行ったメディアを，さらには，そのいい加減な報道に依拠して議論を展開した言論人たちを，筆者が根拠をもって検証していく過程は大変興味深い。ただ，こうしたメディアで活動している人や言論人の多くが文系学部出身であろうことを考えると，この事例は，「大学の

危機」が社会にいかなる帰結をもたらすのかを示しているようでさえある。また，第 2 章において，筆者はリベラルアーツ，教養，一般教育のそれぞれの違いを分かりやすく説明しているが，この部分も示唆に富む。筆者によれば，リベラルアーツは中世からのキリスト教政界を背景にした概念であり，教養は 19 世紀以降の国民国家を背景に発達してきた概念である。また，一般教育は 20 世紀に入ってからアメリカの大学教育の中で誕生した概念である。おそらく，現在では，これら 3 つの概念を意識的に区別して使っている大学は少なく，多くの場合は混同しているものと思われる。こうした大学教育の核となる概念がわかりやすく説明されているのも本書の特徴といえるだろう。

他方で，本書について 2 点指摘したい。これは批判というよりも，より詳細な説明を願うものである。1 点目は「文系」という言葉が指し示す意味内容である。特に単独で「文系」という言葉が使われている場合，これが文系の学問を意味しているのか，文系学部を意味しているのか，あるいは，その両方なのかについてのより詳しい説明が必要ではないかという点である。例えば，筆者が「文系は役に立つ」というときの「文系」は文系の学問を指しているように思われる。一方で，第 1 章に「…未来の大学教育で文系は何をしていけばいいのかという方向性を示すのが，本書の目的です」（58 頁）とあるが，この場合の「文系」は文系の学問というよりも「文系学部」を指しているように思われる。筆者は多くの場合，文系の学問を指すときには「文系の知」，文系学部を指すときにはそのまま「文系学部」という言葉を使っているので，読者にとって大きな混乱はないが，時折，単独で使われる「文系」という言葉についてはその意味するところを詳しく説明してもらえると，より読者にとってわかりやすくなったのではないだろうか。

2 点目は，大学が何に奉仕すべきなのかについて，国立大学に焦点を絞った議論の必要性である。特に終章において，筆者は，ヨーロッパの例とともに明治期における日本の大学を例として取り上げて，大学とは時の政府や国家をはるかに超える「普遍的価値」に奉仕する存在であると主張している。この主張は大変説得的であるが，これを導くための例として取り上げられているのは，福沢諭吉による私立大学（慶應義塾大学）の経営である。大学全体についての議論であり，ここでは大学を国立大学と私立大学に区別する必要はないのかもしれないが，本書が基本的には国立大学を対象とした議論であったことを考えると，終章では，筆者も名前を挙げている山川健太郎と東京帝国大学の関係を例として適切ではないかと感じた。そして，国立大学に焦点を絞って，私立大学ではない国立大学が何に奉仕すべきなのかについての議論を展開したほうが読者にとって論旨を把握しやすくなったと思われる。

言うまでもなく筆者はこの分野を代表する研究者であり，本書も様々な先行研究の成果が取り込まれたものになっている。さらには，これだけ多彩な議論が，精緻さを失わずに平易な文章で 1 冊の新書に凝縮されている。この意味で，本書は専門家でない一般の人が読み，学ぶことのできる大学論として貴重である。